

年間第二十主日

2012.8.19

(ヨハネ 6・51-58)

年間第二十主日の今日も、ヨハネ福音書 6 章のイエスのみことばに耳を傾けましょう。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。」ヨハネ福音書 6 章の中に、何回も出てくるイエスのみことばです。この数週間の日曜日の度ごとに、わたしたちはこのイエスのみことばを何度も聴いてまいりました。イエスはご自分のことを「天から降って来たパンである」と言われるだけではなく、「生きたパンである」と言われています。何故イエスはご自分が「生きたパンである」と言われるのでしょうか。「生きたパン」とはどのようなことを意味しているのでしょうか。「生きたパン」の「生きた」と訳されていることばは、「生きている」とも訳されるべきことばです。つまり、ヨハネ福音書のこの箇所に限って言えば、イエスはこうしてユダヤの人々と語り合っている生身のご自身自身を指して「わたしは生きているパンである」と言われているのです。その生身の「生きているパンである」イエスは、わたしたちにとってはどのようなイエスなのでしょう。わたしたちが生身のイエスを知ることが出来るのは、福音書に語られているイエスのお姿を通してです。イエスがご自分を「生きているパン」だと言われるとき、それは単なる比喩に過ぎないのではなく、福音書の全体で語られている、わたしたちが福音書を通して知っているイエスご自身の全てが、私たちのための「いのちのパン」であると言われているのです。イエスのご生涯の全てが、わたしたちを生かすための「天から降った生きたパン」としてのご生涯であったと言っておられるのです。そればかりではありません。「生きているパン」であるイエスはかつて福音書に語られているようなご生涯を生きたただけではなく、復活して今も生きておられるイエスです。イエスはご自分の復活のいのちをも指して、それがわたしたちのための「いのちのパンである」と言われているのです。「それを食べよ、そしてそれによって生きよ」と言われているのです。

今日の福音の最初の 51 節のみことばに戻って、あらためて味わってみたいと思います。「わたしは、天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」と言うふうに、区切って訳されていますが、もとは区切りなしの一続きのみことばです。その次の「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」と言うみことばも、前のみことばと一つながりになっています。どういうことかと言うと、「わたしは天から降って来た、生きているパンである。」と言われるイエスは誰かに食べられることを望んでおられると言うことです。そのために天から降って来たと言われて

いるのです。そして、「もし誰でもこのパンから食べさえすれば永遠に生きることができる。」とされているのです。そして更にことばを続けて、「わたしの与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」と言われています。「わたしが与えるパン」の与えるという動詞は未来形で表されています。つまりイエスは「わたしが与えようとしているパン」あるいは「わたしが与えることになっているパン」、「それはわたしの肉である」と言われているのです。ヨハネ6章の時点に立ってこの未来形の意味を考えるなら、それはイエスの十字架の死を意識したみことばであると考えることが出来ます。ヨハネ福音書の1章で、「ことばは肉となってわたしたちの間に宿られた」と言われていることとも響きあうみことばです。受肉された神のみことばであるイエスの全生涯、全存在が目指したものは、十字架上でその肉と血をわたしたちのまことの食べ物、まことの飲みものとして与え、わたしたちがそれを食べ、飲むことによって永遠のいのちを得、復活のいのちにあずかることができるためであったと言われているのです。

私たちの耳には込み入った理屈としか響かないかもしれないこれらのことばは、ヨハネ福音書を生み出した人々が生きたイエス・キリストへの深い、透徹した信仰を表明しています。ヨハネ福音書の伝統の最大の特徴はその深い精神性と象徴的表現にもかかわらず、生身の肉を持って生きられ、十字架上に死なれたナザレのイエスへの信仰から決して離れようとはしないことです。ヨハネ福音書のイエスがわたしたちに求めておられることは、私たちが今日もいただくイエスのご聖体を単なるイエスの愛のシンボルとしてではなく、わたしたちのために天から降って、わたしたちと同じ肉の世を生き、わたしたちを神のいのちにあずからせるために、十字架上でその血の全てを流しつくされた、イエス・キリストご自身の体と血として食べ、飲むことです。

今日もわたしたちは、私たちのためのいのちのパンとして、ご自分の全てを私たちに与えようとしておられるイエスの食卓にあずかります。「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲みもの」と言われ、わたしたちに食べられ、わたしたちの生きるエネルギーの糧となることを望んでおられるイエスのご聖体をいただきます。ご聖体を拝領するたびに、ご聖体にこめられたイエスのわたしたちへの思いのすべを受け止めさせていただきたいと思えます。十字架の死に至るまで、わたしたちを生かすためのパンでありたいと願ったイエスの思いを受け止めたいと思えます。わたしたちに食べられることによって、イエスのいのちがわたしたちの肉となり、わたしたちの肉なるいのちがイエスのいのちに結ばれて、イエスの復活のいのちに生きるものとされ、永遠のいのちを与えられて生きるものとなるよう願いをこめて、イエスのこの上ない愛の結晶である、イエスご自身のいのち、ご聖体に近づきたいと思えます。

イエスがどのようなご生涯を生きられ、そのイエスのご生涯は何のためのご生涯であったかを知ることは、そのことに思いを馳せることなしにご聖体に近づいても、それは、わたしたちにとって儀式の一部にすぎません。私たちがいただくご聖体のイエスご自身がわたしたちの心を動かし、ご聖体にこめられたイエスのわたしたちへの愛のかぎりを悟らせてくださるようお願いいたします。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高